

第三部会

S・ヴェイユの工場体験

脇坂真弥

一九三四年末から約八ヶ月間、ヴェイユは哲学教授を休職し、自分を隠して工場労働者として働いた。彼女はこの体験を「人間が他人の意志に委ねられた物になる」奴隷状態だと語ったが、周囲の人々はそれを、たまたまヴェイユだったからこそ——インテリで体が弱く、物事に極度に敏感な女性だったからこそ——生じた個人的判断として受け止めたように思われる。本発表が考察したいのは、彼女の体験のこの伝わりがたさの理由である。

その手掛りを「工場労働者は、自分自身の不幸について自分で書き、話し、考えてみることをさえほとんどできない」というヴェイユの言葉に求めてみよう。これが正しければ、彼女は自分が被った体験の真相を他人に対しては疎か、何よりもまず自分自身に対して表現し、たいことになるからである。では、なぜ彼女はこのような困難に陥ったのか。

ヴェイユによれば、「人間のあらゆる行動には動機が必要である」。労働者もまた人間である限り、上長の命令に「物」のように服従するための動機を自分の意志で探さねばならない。この時、労働者の目の前には「解雇への恐れ」と「金銭の誘

惑」という動機が用意されている。これらの動機を労働の原動力として選ぶ時、彼らは言わば自発性を徴発されるような仕方、自分を物にすることに屈辱的に加担してしまう。

このような加担のメカニズムが悲惨なのは、理論上そこに常に逃げ道が残されているからである。何が人を奴隷状態に突き落とすかに客観的な「閾値」はない、とヴェイユは言う。どんなに辛い状況にあつても「強い魂」を持ってそれを乗り越え、目の前に用意された動機を拒否することは、可能性としてはできたはずだ——当事者は、このようにして自分が打ち砕かれた責任の一端を自身の弱さに見、「私は取るに足らない者であつて、物として扱われるのはまったく当然のことだ」と何よりも自分で感じてしまう。当事者の精神に生じたこの歪み、自己への不信は、自分に何が起こったかを自分自身に対して表現する言葉を永久に奪い、ひいては自分の体験を他人へ訴えるための合理的な言葉を奪う。労働者であつたヴェイユに起こったのはこのような事態だつた。

ヴェイユの体験においてさらに伝わりがたいのは、この体験を通して彼女が回復したと語る「尊厳」である。この尊厳は奴隷状態に抵抗しうる「強い魂」ではなく、まったく逆に、正しく完全に奴隷(物)になることがそのまま尊厳であるような人間のあり方だつた。一切の恣意を捨てて、状況が求めるところにひたすら過不足なく従う、まさに「物」の如き従順を、彼女は尊厳と呼ぶ。しかし、「人間が物になる」という悲惨をその伝えがたさの中からあれほど伝えようとするヴェイユが、同時に「完全に物になることこそが、人間の真の尊厳だ」と結論する

第3部会

とすれば、それほど伝わりがたいものはないだろう。

しかし、この結論は完全に筋が通っている。「強い魂」を自分の内部から打ち砕かれた人間は、恐れや誘惑以外の、かつては持てると信じていた高い動機をもちや持ちえない。より正確に言えば、高い動機を持てると自負することはありえない。そのような人間が尊厳を回復しうる突破口はただ一つ、「いかなる動機も持たない」という可能性だろう。それは自分の人間としての構造を、つまり動機を自ら選択する自由を完全に放棄することであり、人間ではないものに、すなわち完全な物になることにほかならない。

ヴェイユが後に語る「超自然的な奇跡」としての「動機なき行為」は、この尊厳に深く関わっている。しかし、このような行為が本当に可能なのか。ヴェイユが見出した尊厳の可能性は何を意味しているのか。こうした問題については、また別稿で考察してみたい。

ジャック・デリダの『コーラ（場）』

〈第三のもの〉を読む

斎藤 明典

「場」、「場所」については多く語られているが、ジャック・デリダの『Khora』（一九九三年）は、他の「場所論」とは異なる視点を提示している。デリダはプラトンの『ティマイオス』における、第三のものとしての「コーラ（場）」に、彼の

脱構築的読解と、また政治的・倫理的意味を問うものとして、その手がかりとなる〈異質性〉を見出した。「プラトンがコーラの名で指し示しているものは、〈然りか否かの二項性の論理〉に挑戦しているように見え」、「ロゴスの論理とは別の論理」に属するもの、さらに、「コーラは感性的でも叡智的でもなく、第三の類（ジャンル）に属している」、そして「叡智的で不変のモデルたる〈模範（パラディグマ）〉の領界にとって異質であるように見える」と述べている。

プラトンは、『ティマイオス』において、イデアとイデアを分有するものの二つの世界と異なる第三のものを、やや唐突に提起している。宇宙の構造―国家の制度―自然的人間、これらに通じる秩序の作られ方・あり方が描かれ、「常にあるもの」、生成ということをしなないものと、また、常に生成していて、あるということの決してないもの」と、二種のものが挙げられる。そして先にあげたものでは不十分だったとして語られる第三のものは、「あらゆる生成の、いわば養い親のような受容者」である。

ティマイオスは何度も表現を変えながら、三つの種族の性質・働きについて説明を繰り返した後、その終わりがらになって、「いつも存在している〈場〉の種族」を登場させ、ここで初めて使われた〈場〉がKhoraである。「これは滅亡を受け入れることなく、およそ生成する限りすべてのものにその座を提供し、しかし自分自身は、一種の擬いの推理とでもいうようなものによって、感覚には頼らずに捉えられるもの」と述べる。デリダは、これはプラトンが開いた深淵・亀裂であると見た